

詩人 モーム短篇選（下巻）より

私は有名人にあまり関心がない。だから多くの人が世間のお偉方と握手をしたいという欲望を持っているのに我慢がならない。地位や業績の面から抜きん出た人物と会うように計らってあげようかと言われると、私は失礼にならぬような口実を設けて、その名譽を辞退しようとする。友人のディエゴ・トーレがサンタ・アニャへの紹介状をくれると言いつたときにも、辞退した。しかし、この場合に限っては、本心から遠慮しなかったからである。サンタ・アニャは偉大な詩人というに留まらず、ロマンティックな人物で、少なくともスペインでは、そのアバンチュールが伝説となっている。彼の年老いた姿を見るのは、興味深かったのかもしれないが、既に高齢で病身であり、初対面の外国人と会うのは不愉快に決まっていると思つて遠慮したのだ。

カリスト・デ・サンタ・アニャは莊重流派の最後の末裔であつた。バイロン流の反逆兒的な生き方に批判的な世の中であつて、彼はバイロン流の生き方を実践し、その波乱に富む生涯を一連の詩で描き、同時代詩人の中で異例の名声を博したのであつた。彼の詩を二十三歳の時に読んで、すっかり心を奪われた私は、彼の詩の価値を冷静に批評などできない。作品には情熱、堂々たる尊大さ、多彩な生命力があつて、若い私はすっかり心服した。今日に至るまで、音調のよい詩行と耳に残る抑揚が、自分の若い日々の記憶と混つてゐるため、胸の高鳴りなしでは彼の詩は読めない。

カリスト・デ・サンタ・アニャが今日スペイン語圏の人々の間で得ている名声は妥当なものだと私は考へてゐる。以前は彼の詩は全ての若者に口ずさまれていたものだ。友人たちは、彼の熱狂的な生き方、激烈な演説（詩人だけでなく政治家でもあつたのだ）、鋭いウィット、女性関係などについて夢中で私に話したものだ。彼は反逆兒で、時には大胆ではらはらせるような無法者だつた。だが、何よりも恋多き男であつた。人々はこの大女優あるいはあの大歌手との彼の情事を知つてゐた。彼の愛情と苦惱と憤怒が表現された、あの熱のこもつたソネットを暗記するほど誰もが読んだものだ。ブルボン家の誇り高き子孫であるスペイン王女が、彼の懇願に應じて身を許した後、彼の愛が醒めたのを知り、修道院に入ったのも聞き知つてゐた。王女の先祖であるフェリーペ王たちの愛が醒めると、側室は修道院に入ったものだったが、これは王の寵愛を受けた身で別の男に愛されるなど不適切だという理由からだつた。カリスト・デ・サンタ・ア

ニャはどの世俗の王より偉大であつたということだろうか？ 王女のロマンティックな決断に我々は拍手した。彼女に対する賞賛の念を深めることであり、詩人の価値を高めることであつた。

しかしこれは全て過去のことであつた。四半世紀の間、ドン・カリストは彼にとって魅力の失せた世間から身を引き、生まれ故郷のエシハでひっそり暮らしてゐた。ディエゴ・トーレが紹介状を書こうかと言つたのは、セビリアで一、二週間過ごしてゐた私がエシハを訪ねることを告げたときだつた。エシハに行こうとしたのは、詩人の故郷だからではなく、そこが私には思い出のある魅力的なアンダルシアの町だつたからだ。どうさせたのと同じ情熱的な話し方は今でも健在だそうだ。

「今はどういふ様子なのかい？」

「見事だそうだ」

「写真はあるのかい？」私が聞いた。

「あればいいのだけど。先生は三十五歳のときからカメラに向かうのを拒んでおられるからな。後世に若い頃の自分以外は知つてほしくないという意向なのだ」

このような虚栄心がまだ残つてゐるのを聞いて、私は大いに心を打たれた。若い頃の詩人がいかに美男であつたかは知つてゐた。熱狂的に賛美されてゐた美貌が衰えてゆくのを眺め、どれほど辛く自嘲的な痛みを覚えたか、あの感動的なソネットの一つに綴られてゐる。

だが私は友人の提案を辞退した。ほとんど暗記してゐる作品を再読することで満足した。後は、エシハの静かな日当たりのよい通りを自由に歩き回るほうが良いと思つた。それ故、町に着いた時、大詩人自らの手紙を受け取つて驚愕した。ディエゴ・トーレが貴殿のエシハ訪問のことを連絡してきたので、明朝十一時に訪ねてくだされば、喜んでお会いするということだつた。こうなつた以上は指定された時刻に訪問するしかなかった。

私の泊まつたホテルは広場にあつた。春の朝、そこは活気に満ちてゐたが、ホテルから一歩外にでると、まるで人のいない町を歩いている感じだつた。曲がりくねつた通りには、ほとんど人影もなく、教会の祈禱からゆっくりとした足取りで戻ってくる黒衣の女性を時々見かけるぐらいだつた。エシハは教会の多い町で、少し歩くと崩れかけた教会の正門や、コウノトリが巢を作つてゐる塔を見かけることになる。一列の小さなロバ

が通り過ぎてゆくのを一度見た。赤い飾り布は色あせていたし、荷かごで運んでいるものが何か不明だった。だが、かつては栄えていた証拠に、白い家の多くには立派な紋章を上部に飾った石門があった。新世界の富がこの遠方の町に流れ込んで来て、南北アメリカ大陸で富を獲得した冒険家たちがこの町で晩年を送ったのである。

ドン・カリストが住んでいたのはこういう白い家の一つで、呼び鈴の紐を引いた後で、鉄格子の門の前に立っていた時、私は詩人がいかにもふさわしい家に住んでいると思つて満足だった。堂々たる門構えには過去の栄光を匂わせるものがあった、派手な詩人についての私の印象に合致した。呼び鈴の音が家の中で鳴り響いているのが聞こえたけれど、誰も出てこないで、二度、三度と鳴らした。ようやく濃い口髭の老婆が門までやってきた。

「何の用です？」

綺麗な黒目だったが、むっとした表情だった。老詩人の世話をしているのはこの老婆だと思つた。名刺を渡した。

「ご主人と面会の約束があります」

老婆は鉄門を開き、私を招じ入れた。

お待ち下さいと言って、老婆は私を残して階段を上っていった。中庭は通りを歩いて来た後では涼しかった。家の構えは気品があり、征服者の従者が建てたもののようだった。だが今はペンキが剥げ、床のタイルは壊れ、あちこちで漆喰が大きく剥げ落ちていた。全体に貧しい感じはあったが、みすぼらしさはなかった。ドン・カリストが貧しいのは分かっていた。昔は金が幾らでも入ったこともあったが、詩人は金に執着がなく、湯水のように浪費した。明らかに貧しい生活を送っていたが、そんなことに彼は無頓着だった。中庭の真中にテーブルがあり、その両脇にロッキングチェアがあった。テーブルには二週間前の新聞が置いてあった。暖かい夜、タバコを吸いながらそこに座っているときなど、一体どんな事を夢見ているのだろうか、と私は考えた。柱廊の下には薄暗い下手なスペイン絵画がかかっており、埃りをかぶった古風な飾り戸棚付き机がこちらに置いてあり、その上に修理した絵皿があった。戸口の側に古ぼけたピストルがぶら下がっていた。それはいくつもの決闘の中でも最も有名な決闘で彼が使ったものだといふらしい思いが頭に浮かんだ。踊り子のペパ・モンタニェス(彼女も今は

歯の抜けた老婆になっているだろう)のためにドス・エルマノス公爵を殺害したのであった。

漠然と詩人の過去を想像してゆくと、この場の情景はロマンティックな詩人にあまりにも相応しいもので、私はその場の雰囲気や圧迫感に思ひ込んだ。貧困など物ともせぬ気高い生き方は、若い頃の華麗さに劣らず望ましいものと映った。彼の中には昔の征服者魂が宿っているのだ。荒廃してもなお華麗さを残す家で名高い一生を終えるというのは、いかにも彼らしい。詩人たる者、このように生き、死ぬがよい。

私は詩人との面会について、ごく冷静な気分というか、少し面倒とさえ思いつつて来たのであったが、今は胸が高鳴っていた。タバコに火をつけた。約束の時間通りに着いたのだが、彼は一体どうしたのだろうか。沈黙は妙に心を乱した。過去の亡霊たちが音のない中庭に群がり、死に去った時代がかすかな生命を取り戻したように思えた。あの時代の男たちは、今の世界から永遠に失われた情熱と荒々しい魂を持っていた。彼らの無鉄砲な行為や芝居がかった大胆不敵な言動はもはや現代人には不可能である。

物音が聞こえると私の心臓は鼓動を早めた。興奮していたので、彼がゆっくりとした足取りで階段を降りてくるのを目撃して息が止まった。私の名刺を手にしていった。背の高い老人で、極端に痩せている。皮膚は古くなった象牙の色で、髪は豊かで白い。だが濃い眉はまだ黒い。黒い眉のせいで、大きな目はらんと光るように見えた。この年齢で黒い目が未だに輝きを保っているのは見事だった。驚鼻だった。口は一字に結ばれていた。近づくにつれて、にこりともせぬ目が私に向けられ、冷たく値踏みするようだった。黒服で一方の手に鍔広の帽子を持っていた。態度に自信と威厳があった。私がこうあって欲しいと願う、まさにそういう姿だった。眺めているうちに、彼が昔いかに人の心を揺さぶり、いかに胸に訴えたかを理解できた。

彼は中庭に降り立ち、ゆっくりと近づいてきた。ほんとうに驚の目だ。今は驚嘆すべき瞬間に思えた。そこに立ったのは、偉大なスペイン古典詩人たち——見事なフェルナンド・デ・エレーナ、懐古的、感動的なルイス・デ・レオン師、神秘的なフアン・デ・クルス、難解で曖昧なルイス・デ・ゴンゴラ——の衣鉢をつぐ現代唯一の大詩人だったのだ。彼はこの長い系譜の最後であり、しかも先輩詩人に劣らぬ業績を残したのだ。そのとき、不思議なことに、ドン・カリストの抒情詩の中でも最も有名な、あの美しく穏やかな歌が私の心に聞こえてきた。

私はどぎまぎした。出会った時のスペイン語の挨拶の言葉を予め考えておいてよかった。

「先生、私のような外国人にとりまして、偉大な詩人にお目にかかれるのはとても素

晴らしいことでございます」

驚のように鋭い目に可笑^{おかし}がっているような表情が一瞬見えた。一文字に結ばれた口が一瞬微笑のために緩んだ。

「私は詩人なんかじゃありません。動物の剛毛を扱う商人です。間違われましたな。

ドン・カリストならお隣ですよ」

家を間違えたのだった。